

コロナ禍の大学生 どう支える

新型コロナウイルスの影響で、多くの大学が今も通常の授業に戻れずにいる。大学側は経済的に苦しい学生や、オンライン授業が続いて孤独を抱える新生入生らに様々な支援策を打ち出してきた。学部生・大学院生合わせて約1万6千人が学ぶ名古屋大など東海地方の大学では、どのような支援をしているのか。

まずは金銭面の支援

4月から5月にかけて多くの大学が打ち出したのは、学納金の納付期限の延長や支援金の支給だ。支援金はオンライン授業に必要な通信機器の準備費用などとして、3万から5万円を支給する例が多かった。

愛知学院大は4月、一律10万円の支給を発表。6月から学生の親など保証人の口座に振り込み始めた。福嶋隆昭事務部長は「ある程度まとまった金額がなければ教育機会の均等は図れないと考えてこの額になった」。

一律の支援金と別に、家計の悪化などで困窮する学生向けの給付型奨学金を始めた大学もある。中京大は学部生に40万円、大学院生に30万円を給付する奨学金制度を創設。7月末までの1回目の募集には84人が応じ、要件を満たした44人を採用したという。今後の募集では採用条件の緩和も検討する予定だ。

学内への立ち入りが制限されて図書館が使えない状況が長引くと、卒業論文や修士論文の執

筆に支障が出かねない。そこで郵送による本の貸し出しや複写に応じる大学が増えた。同じ学校法人が運営する名古屋外国語大と名古屋学芸大の図書館では、5月から発送時の送料を大学負担で学部生8冊、大学院生20冊まで郵送している。守田正江課長は「本が借りられないものでかじさはどの学年も同じなので、学部1年生から利用可能にした」と説明する。これまでに約1150冊を貸し出した。

名古屋大は「学生支援プラン～夢をあきらめな～」と名付けた緊急対策プロジェクトを実施してきた。新生の授業料の納付期限を2カ月延期。自宅通学生より生活が苦しいと思われる下宿生向けに、3万円の支援金を約5300人に支給した。アルバイトができなくなるなどして経済的に苦しい学生のため、19人を医学部付属病院の事務補佐員や看護補助者として雇用。大学の農場で収穫した野菜も希望者に配布した。鎌沢かおり学

生支援監は「アンケートの結果から、まずは下宿生の食事や当面必要なお金など生活関連の支援が急を要すると思った」。

名大学生支援センターは4月上旬、アンケートで「死にたいと考えることがある」「すぐに相談したい」などと答えた約1割の新生に電話やメールで連絡を取った。教養教育院と連携し、アプリを活用してSNS上でクラス会を作り、学生が交流する場も設けた。9月下旬には全56クラスで対面とオンライン

同時進行の特別ガイダンスを開き、友人関係を築いてもらうことに期待している。鈴木健一・副センター長は「大学以外の世の中が動き出したことで不安が増し、絶望感を抱く人もいるかもしれない。一人で悩まず気軽に相談してほしい」と話す。

名古屋学院大では「未来の学生」を意識した対応を打ち出した。入学金と4年間の学費を全額免除する「特別奨学生」の合格者枠を、昨年度実績の25人から、最大100人に拡充する。

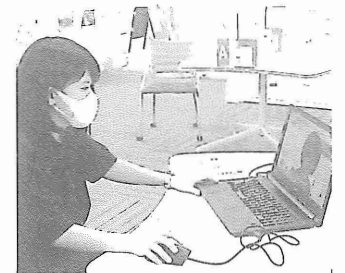
地域や卒業生からも

卒業生や地域社会が学生をサポートする動きも出ている。

愛知県立大と県立芸術大を運営する公立大学法人は5月に「学生緊急支援基金」を創設。3カ月間で約2400万円を集めた。経済的に困窮する学生の支援に活用する。吉川明志総務部長は「卒業生や市民の皆さん、大学と付き合いのある企業や団体から予想を超える寄付が集まり非常にありがたい」。

名大の緊急学生支援基金には約3900万円が集まり、ウェブサイト寄付者から学生への応援メッセージが並ぶ。学生支援センターには卒業生や教職員、市民らからの物資が届き、学生たちに配布された。

新生のために上級生が「ウェブ新歓」を企画する動きも広がった。愛知淑徳大では6、7月に「オンライン新歓」が開かれ、星が丘と長久手の両キャンパスで計85のクラブや同好会、ボランティア団体と、新生407人が参加した。長久手の企画に携わった大学祭実行委員の佐々木陽香さん(20)＝文学部3年＝は「すでに大学の友人がいる2年生以上でもつらいなかで、一番困っている1年生の助



愛知淑徳大・長久手キャンパスの「オンライン新歓」で司会を務める佐々木陽香さん＝7月7日、愛知県長久手市、大学提供

けになりました」と話す。各団体と事前の調整やリハーサルを入念に行い、チャットで気軽に質問できるように配慮した。

星が丘の新歓に参加した交流文化学部1年の山本羽奈さん(19)は入学式もなく、授業は多くが非対面式。「少人数の基礎演習の授業で友達はできたけど、大学生生活を送っている実感は薄かった」と振り返る。サークルなどが個別にSNSで情報発信してはいたが、大学公認のオンライン新歓で先輩からまとまった情報を得られて助かったという。外国人の子どもを支援するボランティア団体に入り、「本格的に活動を始めるのが楽しみ」と語る。(佐藤剛志)

2020年9月9日(水) 朝日新聞 朝刊 承諾番号20-3517

この記事は朝日新聞社の承諾を得て転載しており、朝日新聞社に無断で転載することを禁じます。